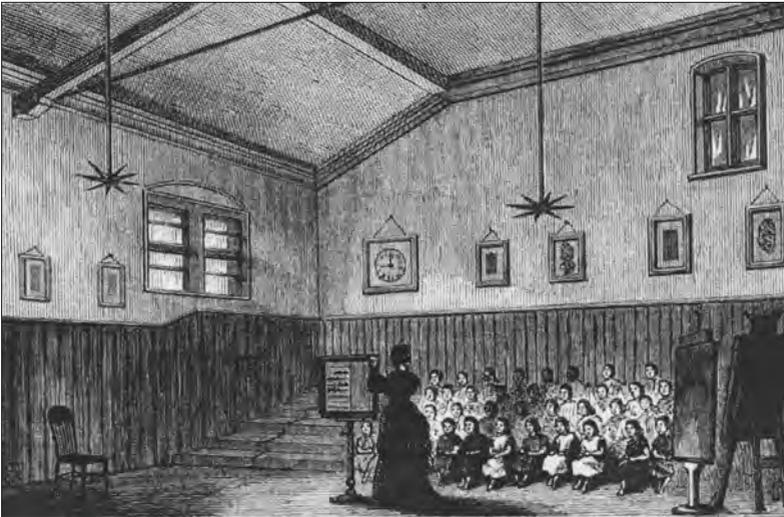


## 第10章『ハード・タイムズ』

# 教育の（暴）力

玉井 史絵



「階段教室でのレッスン」(E・R・ロブソン『学校の建築』[1874年])

ロンドン教育委員会の主任建築家であったロブソンは機能性を重視した学校の設計にたずさわった。

## 第一節 教育と暴力

ヴィクトリア朝文学に描かれる学校は暴力に満ちた場である。『ジェイン・エア』（一八四七年）のローウッドにおける生徒への虐待や、『トム・ブラウンの学校生活』（一八五七年）における生徒同士のイジメなど、学校での暴力の例は枚挙にいとまがない。ディケンズの小説に描かれる学校の多くもまた、暴力が支配する場となっている。『ニコラス・ニクルビー』のドゥー・ザ・ボーイズ・ホールや『デイヴィッド・コパフィールド』のセイレム・ハウスの生徒たちは、校長の鞭の恐怖に絶えずおびえながら生活をしている。デイヴィッドはセイレム・ハウスでの理不尽な暴力の横行ぶりを次のように回想する。『クリークル』は「最も厳格で厳しい教師だった。……彼は毎日右に左に棒を振り回し、兵士のように少年たちに突進して、情け容赦もなく鞭打った。……彼は鞭打ちの技術以外は何も知らなかった」（第六章）。このように学校と暴力が結び付けられている原因として、当時はまだ、子供への暴力がタブーとして認識されていなかったということが挙げられる。子供は原罪によって墮落しているので、邪悪な行いに傾きがちであるとか、子供は本源的に自然に近い存在だから『野蠻』であるとの理由から、彼らの『野生的な』性質は時に暴力を行使してでも矯正されなくてはならないと考えられていた（図版①）。<sup>1</sup>ディケンズの小説では、暴力教師ばかりでなく子供も『野蠻人』の比喩



図版① 『ジャック・ハーカウェイの学校生活』（1871-72）の挿絵  
イトンで教育を受けたイギリスの小説家ブレイスブリッジ・ヘミングによる学校シ리즈の一つ。

を使って表されることが多い。学校は、愛情を持つて子供の徳を育む場というよりは、その〈野蛮性〉を抑圧する場だったのである。子供への暴力の規制が法的に始まったのは、一八五三年になって「婦女子加重暴行防止・処罰法案 (Act for the Better Prevention and Punishment of Aggravated Assaults upon Women and Children)」が制定されてからである。

『ハード・タイムズ』においても学校は暴力のイメージを通して語られる。グラッドグラインドの学校には、鞭も棒も存在しないにもかかわらず、教室風景を描いた第一巻第二章は暴力を想起させる言葉で満ち溢れている。事実の教育の重要性を力説するグラッドグラインドは、「砲口の先まで事実を装填し、一発で子供時代の領域を一掃して粉碎する大砲」(第一巻第二章) のようである。また、馬を描いた壁紙や花模様のカーペットはいけないと力説する「第三の紳士」は「プロの拳闘家」(第一巻第二章) のように好戦的な人物だ。さらに、教師のマチョーカムチャイルドは、壺に隠れた盗賊たちの上から煮えたぎった油を注ごうとしている「アリババと四〇人の盗賊たち」(第一巻第二章) のモージアナにたとえられている。この章には「無垢なる子供たちの殺戮 (Murdering the Innocents)」という、「マタイによる福音書」第二章のヘロデ王による幼児虐殺を暗示する章題が掲げられ、この学校の教育が子供たちの精神を蝕む究極の暴力であることを訴えている。

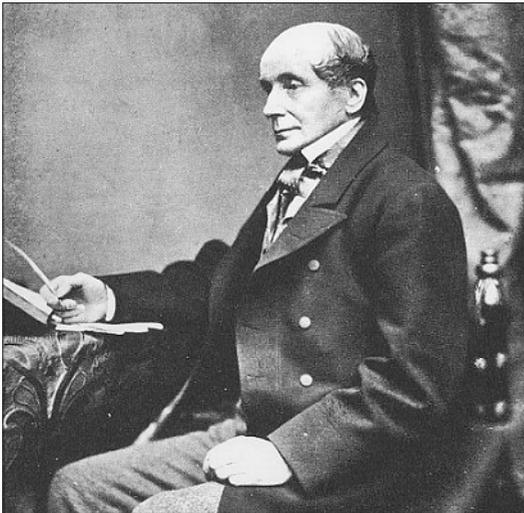
この暴力的な『ハード・タイムズ』の学校風景はディケンズの功利主義批判の表れであるとF・R・リーヴィスをはじめ多

くの批評家が論じてきた。リーヴィスは「ディケンズはグラッドグラインドの家庭とグラッドグラインドの小学校の描写において、ヴィクトリア朝の教育における功利主義の精神を正確に観察している」(Leavis 253) と述べている。こうした批評におおてはしばしば、〈想像力〉を体現するサーカス団が功利主義と対抗していると捉えられてきた。リーヴィスは「彼らの技能は功利主義的計算では何の価値もないが、根源的な人間の欲求を体現し、根源的な人間の必要性に応えているのだ。馬の曲芸はグラッドグラインドには軽薄だと眉をひそめられ、バウンダビーには無駄だと敵意を持つて軽蔑されるが、コークタウンの機械工が……渴望しているものをもたらしている」(Leavis 257) と論じる。しかし、ケイト・フリントが指摘するように、この小説は事実と想像という単純な二項対立の枠組みでは解決できない複雑さをはらんだ作品である (Flint xvii)。キャサリン・ギャラガーは、ディケンズが『ハード・タイムズ』において、いかに巧みに当時の経済学の論理に則りつつ娯楽産業の擁護を行っているかを分析し、この作品が単なる功利主義批判の小説ではないことを論証した<sup>2</sup>。また、キャスリーン・ブレイクは功利主義の原点が快楽の擁護であることに着目し、人々に娯楽を提供するサーカス団の座長スリアリーの哲学はむしろベンサム主義を体現したものだ<sup>3</sup>と論じている。本論もまた、作品の功利主義的な一面を明らかにしていくが、本論で注目するのは教育と娯楽の類似性である。事実と想像力、学校とサーカスは一見対立しているように見えるが、作品においてこれらの要素は複

雑に絡み合っている。サーカスは学校にもなり得るし、事実と想像の境界線はそれほど明確なものではない。そして、事実の教育と同じように、想像力の教育もまた、暴力となり得るのだ。以下、本論では、小説に描かれた教育の諸相を分析し、〈教育〉という行為に潜む根本的な暴力性について考察したい。

## 第二節 学校教育と徒弟教育

最初に検討するのは、グラッドグラインドの学校教育である。「さあ、私が望むものは事実です。ここにいる少年、少女たちには事実以外の何も教えてはなりません。事実だけが人生で必要とされているのです」（第一章）というグラッドグラインドの有名な演説で始まるコークタウンの学校風景には、ジェイムズ・ケイ＝シャトルワース（図版②）が推進した教育改革への批判が込められていると、フィリップ・コリンズをはじめ多くの批評家やこの小説の注釈者は指摘してきた。確かにディケンズは小説のなかで、シャトルワースの功利主義的な教育理念や、彼が導入した詰め込み教育による教員養成制度を風刺している。けれども、この小説を単に功利主義的な事実重視の教育への批判だとする解釈には疑問の余地が残る。なぜなら、ディケンズ自身、シャトルワースが実現しようとした国民教育には常に肯定的だったし、『ハウスホルド・ワードズ』の多くの記事はシャトルワースの教育改革を支持しているからである。編集者ディケンズはあらゆる記事に目を通したと知人に書き送っ



図版②「ジェイムズ・ケイ＝シャトルワース」（1862年の写真）

1839年、教育委員会の最初の長官に任命されたシャトルワースは、19世紀イギリスの公教育の推進に大きな役割を果たした。

4  
 ていることから、これらの記事が彼の意向に反して掲載された  
 と考えるのは不自然である。表向きの批判とは裏腹に、『ハード・  
 タイムズ』にはシャトルワースの教育哲学との共通点が隠され  
 ているのではないだろうか。

グラッドグラインドがまず生徒に投げかけた質問は「馬の定  
 義」である。この場面は十八世紀から十九世紀にかけて活躍  
 したスイスの教育者ヨハン・ペスタロッチによって提唱され  
 た「実物教育」と呼ばれる教育手法のパロディであると言わ  
 れている。貧しい子供たちの教育に生涯を捧げたペスタロッチ  
 は、「下層の中でも最も下層」の子供たちを道徳的、知的に成  
 長させるためには、彼らの日常の経験に根ざした指導をする  
 べきだと考えた。そして、子供が物事を正確に観察し、分析  
 し、描写する能力を育てるために、日常の「ありふれたもの  
 (common things)」を題材にその属性や特徴について説明させ  
 るという指導法を編み出した。ペスタロッチの教育思想は、彼  
 の施設で三年間過ごした牧師チャールズ・メイヨーを介してイ  
 ギリスに紹介され、イギリスの教育改革にも多大な影響を与え  
 た。シャトルワースは一八四〇年代、オブジェクト・レッスン  
 を教育改革の一環として初等教育に取り入れている (Collins,  
*Education 154-56; Paroissien, DSA 272-279; Simpson 37-*  
*38*)。だが、ペスタロッチが元来抱いていた考えは曲解され、子  
 供たちが実際に〈モノ〉を見ることもなく、ひたすら定義とそ  
 れに関する難解なラテン語起源の語彙を暗記するという詰め込  
 み教育へと変質していった (Collins, *Education 153*)。「四足獣」

草食獣」などという日常言語とは程遠い専門用語を並べ立てる  
 ビツアアの模範解答は、まさにこうした傾向を揶揄している  
 のである。

オブジェクト・レッスンでは〈モノ〉は常に実体を伴ってい  
 なくてはならないから、馬を描いた壁紙や花模様のカーペット  
 などは断じて許してはならないことになる。しかし、この授業  
 風景をよく見てみると、子供たちが学んでいるのは必ずしも「馬  
 とは四足獣」、「馬の絵は馬そのものではない」という〈事実〉  
 ばかりではないことに気がつく。

「さあ、質問です。あなたたちは部屋に馬の絵を描いた壁紙を  
 貼りますか？」

少し間をおいて、半分の子供が「はい、先生」と声をそろえ  
 て叫んだ。これに対して残りの半分は「はい」という答えが間違っ  
 ていることを紳士の顔から読み取り、このような試験の習慣に  
 従って「いいえ、先生」と声をそろえて叫んだ。(第一巻第二章)

この場面で子供たちは、「いいえ」という解答を「紳士の顔」  
 から読み取っている。つまり彼らが考えているのは、自分自身  
 が正しいと思う答えではなく、教師が正しいと思う答えである。  
 彼らは自ら考えることなく、権力に従順に従う理想の働き手  
 (hands) となるべく行動規範を学んでいるのだ。こうして学  
 校は、ミシエル・フォーコーが『監獄の誕生——監視と処罰』で  
 明らかにした、〈従順な身体〉を生み出す規律・訓練 (discipline)

の場となつている。「操作され、造られ、矯め直され、服従し、呼応」する身体——すなわち、理想的な工場労働者になるための身体——が生み出される場なのである。グラッドグラインドの学校では、他にも規律・訓練のための様々なメカニズムが働いている。生徒たちは傾斜のある教室に整然と着席して教師の監視下に置かれ、個を区別し序列化する権力の儀式とも言うべき試験を受けさせられる。その結果「二十番の少女は馬の定義ができない」(第一巻第二章)生徒として識別され、他の生徒とは異質なものとして分類されてしまうのだ。

小説ではこうした学校教育の非人間性が、暴力のイメージを通して強調されている。一方、学校とは対照的に、暖かな人間関係によって人々が結ばれる場として描かれているのが、スリーのアリーのサーカス団である。確かに、サーカスの団員は「明らかな優しさで子供っぽさ……何であれ厳しいやり方には不向きな性格」(第一巻第六章)を持つているとされ、彼らの世界にはひたすら効率を追求する功利主義とは別の価値観が働いていることがわかる。けれども、教育という観点からこの二つの世界を比べたとき、グラッドグラインドの学校とサーカス団には相違点とともに共通点もあることが浮かび上がる。サーカス団では家族のように日常生活をともにしながら、技術を継承する徒弟教育が行われる。フーコーは徒弟教育を近代の学校教育と対比し、その特徴として「親方に対する個人的で同時に完全な依存関係、一定の資格試験で終了するものの、厳密な計画にもとづいて細分されているわけではない養成期間」(Foucault

156)などを挙げている。教える者と教えられる者の親密な関係や、生活と教育との不可分一体性は、学校教育に比してより人間的な性質を徒弟教育に付与しているかのようにも見える。実際スリーアリーは、シシーがサーカス団に残るか去るかの選択を迫られたとき、「エマ・ゴードンは……お前の母親になるだろうし、ジョセフィンはお前のお姉さんになるだろう」(第一巻第六章)と言って、サーカス団の家族的親密さを強調する。だが、一方で彼は「わしは天使ではないし、お前がへまをしでかしたら、むつとしてちよつとは罵るかもしれない」(第一巻第六章)とも言い、彼らの教育が厳しさも兼ね備えていることを示唆している。そして、このような徒弟教育の成果が表されているのが次の一節である。

父親たちは皆、回転する樽の上でダンスができたし、ピンの上に立てたし、ナイフとボールをキヤッチできたし、水盤を回せ  
たし、どんな物の上になだつて乗れたし、どんな物でも飛び越え  
られたし、何にも怖気づくことはなかった。母親たちは皆、ゆ  
るいワイヤーの上でもピンと張ったロープの上でも踊れた。(第  
一巻第六章)

サーカス団員は全員が厳しい徒弟教育の結果として等しい能力を獲得しているのだが、ここで繰り返される「皆」という言葉は、「基調」と題する第一巻第五章の冒頭でも使われている。「皆同じ時間に、同じ道を同じ音をさせて、同じ仕事をするために

出かけ、帰宅する」（第一巻第五章）と語り手はコークタウンの工場労働者の重苦しく単調な生活を表現する。学校教育も徒弟教育も方法の違いこそあれ、子供一人ひとりの個性を消し去り、〈従順な身体〉を持つ均質な労働者の集団へと変えていくという点では共通しているのだ。

教育が子供を社会に有用な人材に変えていくプロセスであるとするなら、工場であれサーカス団であれ、それが集団での仕事である限り、それに適した人材を育てるのが教育の役割となる。シャトルワースの教育改革の根幹にあるのは、子供たちを無知なままで放置するよりは教育を施したほうがはるかに国家財政にとって利益となるという、功利主義的な費用便益分析にもとづく考えであった。もともとは医者としてキャリアの第一歩を踏み出したシャトルワースは、最初に赴任したエディンバラとマンチェスターで貧民の悲惨な生活を目の当たりにして、社会改革の根本は教育改革にあるという信念を抱くようになった。「国家が大衆の教育に利益を認めようと思えまいと、貧民を放置すると長期にわたって彼らは国家に依存し続け、その結果、監獄や流刑地に送られる犯罪人となることは明らかである」と彼は最初の教育に関する著作、「貧民の子供の訓練（一八三八年）」のなかで述べている。それゆえ、子供に「勤勉や品行方正な道徳的習慣、宗教観を育むよう訓練し、身分にふさわしい義務を果たすことができるようにしなくてはならぬ」（“A Training” 6）と彼は考えたのであった。ディケンズは『ハード・タイムズ』において、このような功利主義的な教育観を必ずし

も否定しているわけではない。確かにグラッドグラインドの学校での教育は子供に対する精神的な暴力として描かれている。けれども、ディケンズはそうした教育が学校で学ぶ労働者階級の子供たちに及ぼす害悪については、あまり多くを語ろうとはしていない。功利主義的教育の悪影響は、彼らよりもむしろ流階級に属するグラッドグラインド家の子供たちを通して明らかにされているのだ。

グラッドグラインドの家庭の最大の問題は、本来であれば私的な癒しの場であるべき空間が、学校という公的領域のように変質していることである。子供たちは「ひとりで走れるようになるやいなや、勉強部屋へと走らされた。彼らが思い浮かべる最初のもの、思い出す最初のものは、人食い鬼がぞつとするように白く描かれている大きな黒板だった」（第一巻第三章）とあるように、グラッドグラインドの家庭は彼の学校の息苦しさをもそのまま再現している。そしてそこでは学校と同じように、規律・訓練のためのメカニズムが働いている。子供たちは絶えず大人の監視下に置かれ、〈想像〉という精神の自由を奪われた生活を強いられているのだ。だが、政府の報告書に囲まれたグラッドグラインドの部屋が窓のない天文観測所（第一巻第一五章）にたとえられているように、彼は監視をしながらも、子供たちの根源的な精神の欲求を見抜くことはできない。「自らのシステムの勝利」（第二巻第二章）と誇る子供たちの内面には、抑圧された精神の葛藤があることを認識できないのである。その一番の犠牲者とも言うべきルーイーザは、肉体的に「一

人前の若い女性」(第一巻第四章)に成長するとすぐに、中年の実業家バウンダビーのもとへ嫁がせられる。精神性を否定され「若い女性」という身体の価値しか持たないルイーザの姿は、〈手〉の価値しか持たない労働者の姿と重なり合う。労働者の悲劇は中流階級の悲劇へと転化されているのである。もう一人の犠牲者トムもまた、異国の地で孤独に苛まれ、惨めな死を遂げる。このようにディケンズはグラッドグラインド家の子供たちの悲劇を描くことで、功利主義的教育の害悪を強調するが、学校で学んだ子供たちについてはほとんど何も語らない。唯一の例外は模範生ピッツァーだが、彼は完璧な功利主義の権化へと成長するものの、バウンダビーの銀行に職を得るところで小説は終わっている。ピッツァーの受けた教育の害悪は、グラッドグラインドへのしつぺ返しという形で現れるが、ピッツァー自身の悲劇として描かれることはないのである。つまり、労働者階級の子供たちは必ずしも学校教育の被害者とは捉えられてはいないのだ。

教育とは、本質的に国家の経済に有用な人材をできる限り効率的に養成する場だという、シャトルワースに通じる功利主義的な教育観をディケンズは持っていたように思われる。だからこそ、彼はグラッドグラインドの学校教育の非人間性を暴力のイメージを使って表現したものの、その学校教育を受けた子供たちの悲劇は描かなかったのだ。ディケンズの教育観を正しく理解するには、『ハード・タイムズ』以外の作品やジャーナリズム、スピーチも検討する必要がある。

### 第三節 「合理的な学校」

ディケンズが教育の必要性を最も印象深く訴えているのは、『クリスマス・キャロル』の一節であろう。過去の亡霊との別れ際、スクルージは「無知」と「欠乏」という二人の子供の幻影を見るが、この場面には「偉大なる創造の神秘のなかで、人間がどんなに変化し、墮落して、歪んでも、この半分も恐ろしく身の毛もよだつような怪物を生み出すことはないだろう」(第三章)という語りが加えられている。この一文で浮かび上がるのは、二人の子供への同情や哀れみにも増して強い恐怖の念である。ディケンズは生涯、貧民や労働者階級の教育を熱心に支援したが、その根幹にあるのはこうした「無知」の脅威への不安だった。それゆえ、彼は貧民学校(*ragged school*)やメカニックス・インスティテュートのように、貧しい子供たちや労働者階級の教化のための施設を積極的に支援し、その重要性をスピーチやジャーナリズムで訴え続けたのである。イギリスでは、労働者階級に教育を施すことは、かえって彼らの不満を助長するだけだという懸念が根強く残っていたが、ディケンズはこうした懸念を強く否定し、教育の必要性を力説した。一八四三年一〇月に開催されたマンチェスターのアシニアムの年次総会では、「(少しの教育)と大きな無知を比較して、どちらが危険だと思ふか問いたいのです。どちらが悲惨と犯罪の温床となりうるか問いたいのです」(*Speeches* 47)と訴えかけてい

る。教育こそが労働者階級の暴力性を抑制し、社会の安定につながるのだという信念を彼は生涯持ち続けていた。

このような考え方はシャトルワースをはじめヴィクトリア朝の教育改革を推進した人々が共有した考え方であった。ディケンズはシャトルワースとは宗教教育や教員養成の方法など意見を異にする点があつても、国民教育の推進という大枠ではシャトルワースの改革の重要性を十分に理解していた。一八四四年二月のバーミンガム・ポリテクニク・インスティテュートの談話会では、「どんな場合でも、どの場合でも、もし、誠実に報い、善を奨励し、怠惰な者を奮起させ、悪を根絶し正したいと思ふなら、教育——総合的で宗教的に中立な教育こそが、唯一必要かつ唯一効果的な目標となるのです」(Speeches 63)と述べて、国家的な教育制度の必要性を強調している。『ハウス・ホールド・ワーズ』にも、シャトルワースの推進する国民教育を支持する記事が掲載されている。「国内と海外の教師」(HW, 13 April 1850)と題する、W・H・ウィルズによる記事では、シャトルワースが一八五〇年に出版した『イングランドとヨーロッパの人々の社会的状況と教育』を好意的に取り上げ、「海外の教師の努力と国内の教師の怠慢は……必ずやきつと我々を……教育の拡大という仕事に目覚めさせてくれるだろう」と締めくくっている。また、ディケンズとヘンリー・モーリー共作の「ベンディゴ・バスター氏、教育反対の国家防衛について」(HW, 29 June 1850)では、国民教育に反対するバスター氏を登場させることで、逆説的にその愚を風刺している。

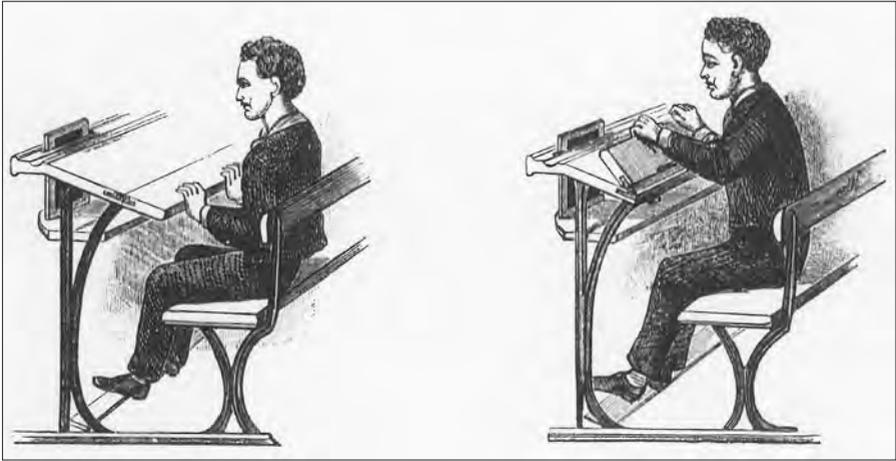
先にも述べたように、シャトルワースの教育改革の目的は、子供たちが将来「身分にふさわしい義務」を果たせるようになることであつた。教師の役割とは「民衆が法に従い、上の者に服従し、家庭的な美德、節制、勤勉、深慮により国家という組織を強化するにふさわしい者となるよう育てること」だとして、一八三九年に彼が執筆したパンフレットには書かれている。<sup>10</sup>ディケンズも同じく現存する階級を是認していた。一八四四年二月のリバプール・メカニクス・インスティテュートの年次大会では、「富、身分、知性の違いは現に存在するし、我々はそれを尊重しなくてはなりません」(Speeches 56)と述べている。また、民衆が教育を受けることで、自分の階級に不満を抱くようになるのではないかとの一部の人々の懸念に対しては、「イギリスではそんな心配は無用だと確信しています。社会の異なる階級の区別が厳格にあり、それを超えることは困難ですから、そのような結果になる心配は微塵もありません」(Speeches 57)と応えている。さらに、一八四七年のリーズ・メカニクス・インスティテュートで行ったスピーチでは、「無知」の力が破壊の力であるのに対し、「知」の力は「耐えること」であり、自制すること。義務を果たす道を知り、それに従うことです」(Speeches 82)と言つて、教育によつて従順な労働者階級が生まれるという考えを示している。

シャトルワースにとつて労働者階級にふさわしい教育とは、日常生活に根ざした教育であり、将来の労働に備える実用的な〈訓練〉であつた。彼がペスタロッチのオブジェクト・レッ

スンを積極的に自らの教育に取り入れたのもこのような理由からだった。デイケンズもやはり、貧しい子供たちには実用的な教育を施すことを支持していた。『ハード・タイムズ』では批判されたオブジェクト・レッスンも、『ハウスホルド・ワーズ』ではむしろ推奨されている。「合理的な学校」と題する一八五二年二月二五日付の記事には、シャトルワースと並ぶ十九世紀の教育改革者、ウィリアム・エリスによって一八四八年に設立されたバークベック・スクールの授業風景が紹介されている。これは『ハード・タイムズ』の授業風景の原型とも言えるものなので、詳しく見ていく必要がある。オブジェクト・レッスンでは、たとえば、教師が子供たちに「私のポケットのなかにあるものは、それだけではあまり力はありませんが、同じ種類のもので沢山集まって大きな仕事を成し遂げることができません」と話しかける。答えは「ペニー」だ。その後、「銅(copper)」「不透明な(opaque)」「可鍛性の(malleable)」など、ペニーの材質や性質を表す言葉を、子供たちは教師の誘導にしたがって次々に学んでいく。『ハード・タイムズ』の授業に比べると、ここではより身近にある〈モノ〉に根ざした授業が行われていることがわかる。だが、何よりの違いは、「合理的な学校」においては、子供たちが楽しみながら学んでいる様子が肯定的に描かれている点だ。「すべての子供たちは十分幸せそうぞ」(『Rational Schools』337)、質問ごとに元氣よく挙手し、発言する。グラッドグラインドやマチョーカムチャイルド、「第三の紳士」が威圧的に質問を投げかける教室風景と

は異なる雰囲気包まれているのである。

バークベック・スクールでは、グラッドグラインドの学校と同様に、〈従順な身体〉を生み出す様々なメカニズムが働いている。子供たちは年齢や学習の早さによって六つのクラスに分類され、教室への出入りも列になって整然と行われるなど、秩序を保つ工夫がなされている。また、授業の前には「手を下ろして」「手を膝の上に」など、行動を細かく規定する指示が出され、子供たちは、「美しく同時に」その指示に従っている(図版③)。さらに、学校の一日は時間割によって授業時間、休憩時間などに厳密に分割され、工場の労働と同じく、使われる時間の長さや質が規定されている。このようにして、「種別化された作業をいとなみうる身体」(Foucault 195)を持つ将来の労働者が育成されるのである。さらに、ここでは賃金と物価の関係、賃金と資本の関係など、経済学(political economy)の基礎も子供たちに教えられている。そして、教師と子供たちのやり取りが続き、最後は「国家の富を増やすためには知識、技能、勤勉、分別が必要」(『Rational Schools』341)と「結論に至る。労働者は経済の仕組みを学ぶことで、資本家と自らの利害が一致していると認識し、より調和的な労使関係を築くようになる」というのは、当時の功利主義者たちが共通して持っていた考えだった。シャトルワースは、「政治学で確認された真実を労働者階級に教え、常に、且つ熱心に、正しい政治学の知識が普及するよう努めなくてはならない」と述べている<sup>12</sup>。そのことにより、「資本家の雇用主と労働者との間に……より親密で暖かな



図版③『学校の建築』（E・R・ロブソン、1874年）

「“上げる”という指示で机のふちをつかむ」「“机”と言う指示で机のフラップを迅速に音を立てずに上げて腕を下ろす」など、教師が子供に与えるべき指示と、その指示に対する生徒の動きが説明されている。

関係）(Four Periods 60) が実現すると彼は考えていた。

ディケンズは一八五四年二月三〇日、チャールズ・ナイトに宛てた手紙のなかで『ハード・タイムズ』について言及し、「私の風刺は数字や平均値しか見ない人たちに向けられているのであって、それ以外の何ものでもない。彼らは現代の最悪最大の悪の権化であり、経済学の真に有益な真実をこの先長きにわたって損ない続けるだろう」(Letters, 7: 492) と書いている。『クリスマス・キャロル』や『鐘の精』をはじめ様々な作品で幾度となく経済学を攻撃してきたディケンズだが、この一節を読む限り、「平均値しか見ない人たち」は問題であったとしても、経済学そのものには「真に有益な真実」があると認めていることがわかる。その真実とは何か。それはおそらく、彼がスピーチやジャーナリズムで幾度となく強調した階級調和の重要性であろう。だからこそ、『ハード・タイムズ』で彼はストライキを否定し、死に際のステイブン・ブラックプールに「すべての世界がもつと一緒になれますように。互いをよりよく理解し合えますように」(第三巻第六章)と言わしめているのだ。最後に、このような世界を実現する手段としてディケンズが小説で提示した第三の教育、すなわち〈娯楽〉という教育について考察したい。

## 第四節 〈娯楽〉という教育

「人は楽しまなくちゃいけません」(第三卷第八章)というスリアリーの言葉に代表されるように、『ハード・タイムズ』は娯楽擁護の小説である。グラッドグラインドの教育が生み出す精神的荒廃に対して、スリアリーのサーカス団は「心の知恵」(第三卷第一章)を補うことによつて登場人物たちに癒しを与えている。だが、そもそも、教育と娯楽はヴィクトリア時代において不可分一体であった。シャトルワースがその教育論のなかでしばしば強調するのは、教育のなかに娯楽的要素を取り入れる必要性である。彼は「貧民の子供の訓練」で、子供にとつて勉強を「楽しい練習」(“A Training” 28)にするべきだと言っている。『ハウスホールド・ワーズ』においても、子供たちが楽しく学んでいるか否かということは、良い学校と悪い学校を区別する尺度となっている。パークベック・スクールの授業は「楽しい娯楽」(“Rational Schools” 341)である。一八五〇年八月三十一日付の『ハウスホールド・ワーズ』で紹介されたノーウツドの貧窮院学校では、少年たちに水兵になるための訓練が課されているが、これは「明らかに楽しみの源」だったと筆者は述べている。<sup>13</sup>グラッドグラインドの教育の問題は、教える内容もさることながら、この娯楽の要素が完全に欠如していることなのである。

教育には娯楽的要素がなくてはならないのと同様、娯楽に

は教育的要素がなくてはならなかった。ディケンズが度々年次大会に招かれ、スピーチを行ったメカニックス・インスティテュートも、当初は労働者階級に「合理的な娯楽 (rational recreation)」を提供するという目的のもと、設立されたものだった。それ以前の民衆の娯楽であった飲酒を伴う馬鹿騒ぎは、潜在的に暴動に発展するエネルギーを秘めており、中流階級にとつて脅威となりうる。十九世紀のジャーナリストで歴史家のウィリアム・クック・テイラーはランカシャーの労働者の生活実態を調査したのち、「心には安全弁が必要である。つまり、楽しく有益で健康的な活動のための手段が必要なのだ」と述べている。<sup>14</sup>シャトルワースはメカニックス・インスティテュートの目的に関して、労働者に「合理的な娯楽の源となるような一般的知識」を与え、「彼らの趣向を仲間との放蕩の楽しみ以上に高める」(Four Periods 63)ことだと述べている。中流階級の人々は労働者階級の持つ破壊のエネルギーを「合理的な娯楽」へとシフトさせることにより、社会の安定化を図ろうとしたのである。

『ハード・タイムズ』の労働者には二つの娯楽がある。図書館とサーカスだ。図書館には「二五時間の労働のあと」(第一卷第八章)デフォーやゴルドスミスの本に読みふけるコークタウンの労働者たちがいる。サーカスに関して言えば、小屋の裏で覗き見をするルイーザやトムと「大勢の子供たち」(第一卷第三章)以外の観客のことは何も触れられてはいないが、コークタウンで興行が行われている以上、大勢の労働者たちがそれ

を見て楽しんでだと考えるのが自然だ。ギャラガーが指摘するよ  
うに、「スリアリーが町にやってきたとき、人々は働く。一方、  
労働組合の指導者がやってきたとき、彼らはストライキをする」  
（Gallagher 75）。つまり、サーカスが労働者の不満をそらす（全弁）  
となっているのだ。ディケンスは文学という〈娯楽〉を  
創出する者として、種々の娯楽産業の保護と発展に力をつくし  
ている。たとえば、王立作家基金（Royal Literary Fund）、劇  
場基金（General Theatrical Fund）など、困窮した作家や役  
者たちの生活を保護する基金のために奔走し、娯楽産業に携わ  
る人々の生活の安定に寄与した。また、先に見たように、彼は  
メカニックス・インスティテュートで頻繁に演説を行っている  
が、それは付属の図書館で労働者たちが楽しむ読書という娯楽  
の普及のためでもあった。

学校での事実の教育に対して、娯楽が提供するの**は想像力の  
教育である**。『ハード・タイムズ』における想像力とは、おと  
ぎ話の世界の妖精や大男を空想する力にとどまらない。それは、  
他者の存在に気づきその心に思いを馳せることのできる力でも  
ある。だからこそ、サーカスと読書という二つの娯楽に親しみ、  
グラッドグラインドの学校教育にも毒されることがなかったシ  
シーだけが、<sup>15</sup>ルイーザを救うことができたのだ。グラッドグ  
ラインドの監視の眼差しとは異なり、シシーの眼差しは他者の心  
中を理解し、他者を思いやる慈愛に満ちている。ルイーザとバ  
ウンダビーの婚約が決まったとき、「シシーは振り向き、驚き  
と同情と悲しみと疑いと、様々な感情の入り乱れた気持ちでル

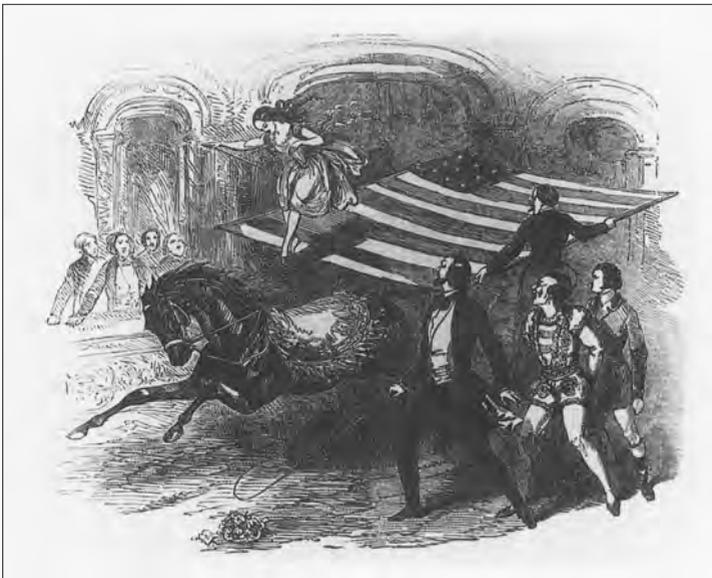
イーザのほうを見つめた」（第一巻第一章）と記されているが、  
この一節はシシーが想像力の教育を経て身につけた他者を思い  
やる能力を端的に表している。コークタウンの住民もまた、図  
書館で読書を通して他者の存在を知っていく。「こうした読者  
たちが驚きを覚え続けるというのは、落胆すべき状況だったが、  
気の滅入るような事実でもあった。彼らはどこにでもいるよう  
な男女の、人間らしい性質や、人間らしい情熱や、人間らしい  
希望と恐れ、葛藤、勝利と敗北、悩み事と喜びと悲しみ、生と  
死に驚きを覚えたのだ」（第一巻第八章）。

このような娯楽という想像力の教育によって生まれる他者の  
存在の気づきは、階級を超えたより大きな連帯意識へと発展  
し、〈国民〉を一つに結びつける可能性をも秘めている。ディ  
ケンスは一八四七年三月の劇場基金の年次総会でシェイクスピ  
アの偉大さについて触れた後、次のように聴衆に語りかけてい  
る。「造物主の一筆で全世界が家族になるとしたら、紳士諸君、  
考えても見てください、今宵、そして、いつでも、われわれの  
間に仲間意識があるのは、そのような芸術、そのような作家に  
多大の恩恵をこうもついているからだ」ということを」（*Speeches*  
19）。この連帯意識こそが、資本家と労働者の対立をも解消し  
調和的な社会を築くというユートピア的なビジョンを、ディケ  
ンスは抱いていた。一八五二年九月、マンチェスター・フリー・  
ライブラリー開館の際の演説で彼は、「ここに収蔵されている  
本が、人生の苦難や苦勞を乗り切れるよう「労働者」を「元氣付  
け、自尊心を高めてくれるでしょう。そして、資本家と労働者

が対立しているのではなく、互いに頼り合い、支え合っていることを教えてくれるでしょう」(Speeches 153) と述べている。事実の教育では経済学を通じて教えられる資本家と労働者の相互依存関係だが、想像力の教育では、他者への気づきを通じて、両者が「互いに頼り合い、支え合っていること」が確認されるのである。フリントはコークタウンの住民の読書が「個々の違いではなく同一であることを強調する言葉で表現されている」(Print xxiii) という点に着目している。事実の教育が均質な身体を作り上げるプロセスであるなら、想像力の教育は均質な心を作り上げるプロセスと言えよう。どちらも最終的には従順な労働者を生み出すという結果につながっていくのだが、そのいずれもが教育の力であり、また「暴力」なのだ。

想像力の教育が他者との同質性を強調する一方で、他者との異質性を強調することもある。その一例がスリアリーのサーカス団の出し物である。チロルのフラワーショーや日本の天皇の皿回しなど、サーカスには異国の土地の文化を題材とした芸当で満ち溢れている(図版④)。スリアリーのサーカス団のモデルとも言うべきアストリー劇場のサーカスに関して、ディケンズはいくつかのエッセイで言及しているが、そのうちの二つ、「先のロンドン市長の就任披露パレードに関するブリー氏の見解」と題するエッセイでは、次のように述べている。

どんな地域へ旅の範囲を広げたとしても、どんなに幅広い経験を積んだとしても、アストリーの円形劇場へ足を運ぶたびにま



図版④「ロンドンのドルーリー・レーン劇場での馬術ショー」  
『イラストレイティッド・ロンドン・ニュース』(1853年11月26日)

だまだ多くのことが学べるとブリー氏は述べている。というのも、その建物のなかでは、この世の国にあるなんて思いもしなかったような、途方もない衣装や奇妙な武器や、一見すると説明のつかないような振る舞いや習慣を見ることができるところだ。ブリー氏はこのようにして、タタール人やインディアンや中国人についての知識を身につけ、珍しい種族の習慣に関して大いに啓蒙されたと言っている。(HW, 30 November 1850)<sup>16</sup>

娯楽は他者への気つきを通して階級を超えた連帯感を生み出すと同時に、その枠外にある他者との違いを強調することで、〈国民〉としての意識を一層補強する。こうして、〈従順な身体〉を持つ労働者たちは、〈合理的な娯楽〉を与えられることで不満の捌け口を見出し、コークタウンのような〈世界の工場〉として栄える産業都市で、資本家と自分たちは「互いに頼り合い、支え合っている」と信じて働き続けることになる。『ハード・タイムズ』における学校と娯楽という二つの教育を通して見えてくるのは、帝国主義という大きな暴力の構造に組み込まれた労働者たちの姿でもあるのだ。

注

1 Elizabeth Gargano, *Reading Victorian Schoolrooms: Childhood and Education in Nineteenth-Century Fiction* (New York: Routledge, 2008) 90.

2 Catherine Gallagher, *The Body Economic: Life, Death, and Sensation in Political Economy and the Victorian Novel* (Princeton: Princeton UP, 2006) 62-85.

3 Kathleen Blake, *Pleasures of Benthamism: Victorian Literature, Utility, Political Economy* (Oxford: Oxford UP, 2009) 42-81.

4 ディケンズはエミール・デュラールに宛てた一八五三年二月四日の手紙で、「私は大変な労力を払って『ハウスホルド・ワーズ』に私自身を散りばめているので、全く手をつけなかったページはほとんどないから이다」(Letters 7: 220) と書いている切っている。

5 Michel Foucault, *Discipline and Punish: The Birth of the Prison*, trans. Alan Sheridan (Harmondsworth: Penguin, 1977) 136. 『パンチル・フーコー』『監獄の誕生——監視と処罰』田村俶訳（新潮社一九九七年）一四二頁。

6 James Phillips Kay, "A Training of Pauper Children: A Report Published by the Poor Law Commissioners in Their Fourth Annual Report" (London, 1839) 5.

7 ディケンズのシャトルワースに対する態度に関して Anne Hiebert Alton, "Education in Victorian Fact and Fiction: Key-

- Shuttleworth and Dickens's *Hard Times*," *Dickens Quarterly* 9.2 (1992): 67-81. 青木健「リットンと貧民学校——社会活動家と作家の狭間で」『*Seijo English Monographs*』第四〇号（二〇〇八年）一五～三五頁を参照<sup>20</sup>。
- 8 [W. H. Wills,] "The Schoolmaster at Home and Abroad," *HW* 1 (1850): 82-84.
- 9 [Charles Dickens and Henry Morley,] "Mr. Bendigo Baster on Our National Defences against Education," *HW* 1 (1850): 313-19.
- 10 Frank Smith, *The Life and Work of Sir James Kay-Shuttleworth* (Bath: Cedric Chivers, 1974) 87.
- 11 [Henry Morley and W. H. Wills,] "Rational Schools," *HW* 4 (1852): 337-42.
- 12 James Kay-Shuttleworth, *Four Periods of Public Education as Reviewed in 1832, 1839, 1846, 1862* (London: Longman, 1862) 63.
- 13 [Frederick Knight Hunt,] "London Pauper Children," *HW* 1 (1850): 552.
- 14 William Cooke Taylor, *Notes of a Tour in the Manufacturing Districts of Lancashire* (London: Duncan and Malcolm, 1842) 133.
- 15 「お父さんを元気付けるためによく本を読んであげたわ。お父さんはそれがとても好きだったの」(第一卷第九章)とシシーはルイーズに語っている<sup>21</sup>。
- 16 Charles Dickens, "Mr Booley's View of the Last Lord Mayor's Show," *HW* 2 (1850): 217.